

私のせいなのか？

2004年10月1日の北海道・毎日新聞に、来年遺伝子組み換え栽培か〆の見出しが出てから北海道の農業界に挑戦する私の名前が頻繁に聞こえてくるようになった。

「自慢か！」そう、単なる売名行為であればそれはただの目立ちたがり野郎の延長で済んだ話だった。私がテレビ、新聞などで好き勝手に言うものだから、その物言いに苦々しく思った方たちと組織があった。

その年の春くらいから道庁農政部では北海道において遺伝子組み換え作物は北海道農業にどのように影響を及ぼすか、栽培には規制は必要なのかなどを話し合っていた。

結論から言うと、私が出しゃばらなければ少しは違っていた、らしい。04年10月1日までは研究機関は組み換え作物栽培には許可も届け出も必要なし、生産者は道庁農政部に紙切れ1枚を届け出するだけで栽培可能だったようだ。

「はい、はい、悪るーございました」と言っ、クルッと回ってペロッと舌でも出しましょうか。10月2日に知っていたら、しっかりそのように対応していたかもしれないが、この北の大地においてバイオニア精神全開のオヤジが放った矢の行方は直球

ど真ん中だった。

そんな裏事情を知ったのは半年くらい経ってからであったが、その時点でメディアは道庁サイドにも取材をしていたので、そのことを私に伝えず世論を面白く煽った。実に小頭の悪い連中は癖が悪い！これは道庁・農政部だけではなく、その政を現場で仕切っていた北海道大学の一部の教授も同罪なのだ。

この同罪の汚名を着せられた農学部教授は、私は科学者だから遺伝子組み換えに反対の立場はとれない。と言いながら、出した結論は研究所などには届け出のみ、生産者は32万ながしの現ナマと、税務署に提出する書類の何倍もの関係書類を必要とする条例を作り、「さすが私はエライ！」と、さぞかしご満悦に酔いしれるのだからオメデタイ先生（もちろん良い意味）である。さらに悪い癖があったようで、この条例づくりを仕切っていたオメデタイ先生は会話の最後に「消費者が理解するまで農家に組み換えはさせない！」と小さな声で吠える。

Vol.119 貧困からは何も学ばない!



宮井能雅

1958年3月、北海道長沼町生まれ。現在、同地で水田110haに麦50ha、大豆60haを作付けする。大学を1カ月で中退後、農業を継ぐ。子ども時代から米国の農業に憧れ、後年、オーストラリアや米国での農業体験を通して、その思いをさらに強めていく。機械施設のほとんどは、米国のジョンディア代理店から直接購入。また、遺伝子組み換え大豆の栽培を自ら明かしたことで、反対派の批判の対象になっている。

もちろん知っているのだ。

北の大地に花咲く北海道大学農学部の教授である。化学的にどうなのか、その当方で組み換え作物が登場して9年が経ち検証は十分できた。どれだけ生産者に利益を与え、どれだけ生産者の苦役を解放できるのか。その結果、北海道農業のみではなく、流通、加工、販売、消費にどれほどのメ

オレにも 言わせる!

北海道長沼発 ヒール・ミヤイの憎まれ口通信

リットを与えるか想像しただけでもテストステロンが放出されオッタツテくる(男性特有の現象)のだ!

そのようなことが分かっているなら、なぜオメデタイ先生は生産者に許可制を作ったのか? 私よりも目立ちたがりで、よくある学者の名譽欲の一部なのかもしれませんね。ここで生産者には届け出のままにしていたら、オメデタイ先生の存在価値がゼロになる恐怖もあったのでしょうか。遺伝子組み換え作物栽培のハードルを上げれば自分の社会的価値も上がるとでも考えたのでしょうか。生産者目線からしたら、そんなオメデタイ先生の存在など、どうでもいいことで近い将来この判断は行政の権限を越えた遺物である、と評価されることを望みます。

パイオニア精神

まだこのオメデタイ話は続きます。北海道産業用大麻可能性検討会なるものが道庁主催で立ち上がり、無毒の麻の栽培を普及しましょう! となった。本誌でも以前この件について記事が記載されていました。このオメデタイ先生は、その後ラジオに登場して、組み換えは消費者の……と規制は正しかった持論を持ち出すことになる。麻に関しては「このようなまだやったことがない

ことを挑戦するのがアメリカから引き継がれたパイオニア精神を持った北海道には必要です! は? え? おい、マジで今なんて言った?

やっぱりそうか、組み換えは賛成だったが、生産者に主導権を握られなくなかったということですね。

パイオニア精神という言葉を使うやつに限って、うさん臭さがプンプンする。確かにある農学部教授のように、ここは農学部であって農業学部ではありません」と本音を言っていたただいた方が気持ちには楽になれる。

作物をたくさん作るには悪なのか?

同じ農学部のある名誉教授は道北の寒村の生まれで、町から10kmくらい離れた地区の小学校に通っていたそう。想像してほしい、戦後すぐのときだ。もちろん給食はない。教室の中では先生と半分の生徒はおにぎり一個であったり、冷え切ったイモを食べ、生徒の半分くらいは弁当も持って来れないので、冬期間は屋根のツララをやかんで溶かしてすすっていたという。その名誉教授は「農家だったので最低限の弁当はあったそう。私は「分け合うことはなかったのですか?」と聞いた。答えは「同級生であっても分け合うこと

はなく、自分たちが黙々と食べる姿に恐怖を感じた」だった。

この名誉教授は北海道大学に進むときに「食べる」ことに関して農学部に入った。アルバイトの家庭教師で教えた後に出る紅茶とケーキの味が忘れられない、と語っていた。この名誉教授は常日頃から、貧困からは何も学ぶ物はない! 決して食料を切らしてはいけない」とどめは、都会育ちの農学部教授には理解できないんだよ」と言っていた。

今と違い、なんらかの条件と歯車が合わない、富の再配分は出来ないことを日本は経験していることを忘れてはいけない。組み換え由来の飼料を食べさせ、牛乳、バター、チーズなどの乳製品は北海道の特産です。食用油のほとんど、ビール、第2のビール、業務用醤油、ビタミンCはレモンの4倍のビタミンCを含有するレンコンから作っているのか? しつかり毎日、毎食食べていながら、組み換え反対? あんた、前頭葉もしくは大脳の一部が異常だと気づいていないんだね。

経済評論家 西部邁さん

こんな方もいる。1月に亡くなった経済評論家で北海道出身の西部邁さんは長沼町にもゆかりが深い方だ。彼の生涯を描いたものをネット

で探した。そこには西部さんが中学のときのこと書かれてあった。

兄と私は、しばしば、弁当を持たずに通学していた。(中略)

在校生1500人という大きな中学校であったが、昼休みの弁当時間、屋内運動場に出てくるのが兄と私だけということも何度かあった。私はこちらの入口あたりからバスケットボールを蹴ると、向こうの入口あたりから兄がそれを蹴り返す。

お互いに一言も発せず、30分後、それぞれ教室に戻るわけだ(「寓喩としての人生」徳間書店 1998年)

ユーチューブで、西部、北海道と検索していただきたい。その2分59秒の動画の中に北海道の本音があふれる。「小学校、中学校、高校には、はつきりいってロクな奴がいなかった。学校の先生もロクな奴がいなかった。隣近所にもロクな奴がいなかった」

ほう、まったくどこかの誰かと同じことを言うものだと思った。お会いしたことはないが、貴重なご意見番が亡くなったことは国家の損失である。もしお近くにお寄りの際はご先祖のご実家の長沼町・本行寺でお線香をあげてください。